

# 博士論文審査報告書

## 論文題目

風景を抽象化する建築空間の実践的研究  
Architectural Design with Abstraction of Urban Scenery

申請者

田中	智之
Tomoyuki	TANAKA

2014年6月

本論は、周囲の風景と建築の内部空間との関係について、既往の建築作品に見られる試みを系譜的に整理し、その上で作者自身が新たに構想する「風景を抽象化する設計手法」のコンセプトモデルを提示したものである。その構想を作品として現した「抽象の森」のデザイン、およびその裏付けとなる論考をもって博士（建築学）の学位を請求するものである。あわせて、モデルにより提示した設計法の内容に基づいて、実際に自らが設計を行った建築作品群の再考察を行い、その理論と実際の設計手法の関係を検証している。既往の試みの中には見られない、本作品の特徴や有用性を明らかにした上で、今後の建築設計に資する設計方法論としてまとめられている。

本論は次の4つの章と、各章を要約した終章から構成されている。

まず第1章では論の背景として、風景を抽象化する必要性について述べている。建築を設計する上で、今日の特に都市部などでは周囲に取り込みたいような自然や、美しい景観に囲まれることは少なく、多くの建築はコートハウスの形式や、目隠しのルーバー等により外壁にフィルターをかける形式を選択してきた。これらに対し、「絶縁」でも「曖昧化」でもない新たな「抽象」という方法によって、周囲に閉じるのでもなく、また部分的に隠すのでもない、周辺環境と接するための第三の方法を提示した点に、この作品の特徴がある。好ましいとは言えない都市近郊の立地の中で、建築内部に良好な空間を獲得するために、あえて美しくもなく凡庸な景観をも取り込みながら、意図的な操作によって風景を抽象化し、内部空間の構成要素に変換している。

作者は現代において、周辺の環境や風土をありのままに“受け容れる”ことの重要性と可能性を指摘し、都市の凡庸なる風景の要素を、現代社会の“実態”として評価し、その中の“どこにでもあるような風景”を取り込みながら、それらを抽象化することによって受容する、人の生活する器としての建築の創造を目指している。

手法としての風景の抽象化を「外部景観の奥行きを捨象し、建築空間を形成する要素との前後関係を曖昧にし、風景を再編集すること」と定義し、内立面に投影される風景が奥行きを消されて平面化し、その奥に広がる空間との相対的な前後関係が曖昧になる状態を提示している。また同時に、抽象化の方法として、従来の建築作品で行われてきた虚像化や開口部を限定する操作によるものではなく、空間構成および内立面を総合した“空間”や“境界”全体による抽象化の可能性を提起している。

第2章では、風景の抽象化における本論の作品系譜の中での位置付けとして、主としてモダニズム建築の歴史において、風景の抽象化に関して試みられたと考えられる事例の整理と、その中での分類を考察している。

風景の抽象化に関して、その風景の扱いは概ね虚像と実像に大別すること

ができるとし、虚像の範疇の中では、その手法は2つに分けられ、1つ目は風景を取り込む過程で境界を半透明化したり、ぼかしたりすることで「曖昧化」し、風景を虚像化する方法であるとし、他方は、外部風景や内部風景が鏡面等に映った虚像を用いて空間を「錯乱化」する手法であるとしている。

実像の範疇では、実像を用いて風景を抽象化する事例は次の3つの手法に分けられるとしている。1つ目は開口部のディテール操作等により風景を「平板化」する方法。2つ目は開口部のプロポーションを通常の比率に比べて大きく「変形化」することで、風景を奇矯なものにする方法。3つ目は風景を取り込む過程において、その一部あるいは大部分を隠蔽し、「省略化」することで抽象化を図る方法であるとしている。

これらについて、縦軸に虚像／実像を、横軸に立面／平面をとるマトリクス上に位置づけて、事例を整理している。これまで虚像、実像ともに立面による抽象化の事例がほとんどであり、本論の“内立面”と“奥行きのある浅い空間”という立面（全体）×平面（全体）を統合する構成は、過去の系譜には見ることがなく、新しい風景への“構え方”であると位置づけている。

第3章では、周辺景観の取り込み方に関して、従来の手法とは異なる空間構成法を模索し、外部景観要素を生かしつつ良好な内部空間を構成する方法によって、設計試案「抽象の森」を提示している。

抽象化の手法として「奥行きのある浅い空間×建築の内立面構成」の考え方をとり、それぞれ異なるタイプの平面と立面を組合せた、3つの構成面をもつモデルを制作している。これら3種類のモデルをそれぞれ空間化し、組合せ、統合したものが、最終的な設計試案となる「抽象の森」である。3つの空間モデル相互をそれぞれに対する“他者”と見立て、それぞれの外観を互いに外部景観として捉える構成を考案し、設計手法のコンセプトモデルとして提示している。々の空間が近接し、高密度の状態でも配置されながらも、外的環境の景観が抽象化され、それぞれの建築空間には一定の快適性や安定性をもたらされることが期待されるが、そのような関係性は、住宅はもとより、より広範な建築対象にも必要とされることを示唆している。

第4章では、設計試案「抽象の森」を構成する3つの空間モデルの、試行段階にあった実作「吹上の家」をはじめとする3作品に関し、そのモデルを評価し、さらに最終的なコンセプトモデルに基づいて、より空間の質を高めるための再考察を行っている。実作においては様々な現実的制約により理論と建築の間に齟齬が生ずることも多いが、理念上の理想的な空間構成のあり方を検証することで、設計手法をより純化させようとする試みである。

すなわち「吹上の家」、「西新の家」、「京町の家」のそれぞれについて、平面および内立面の成立に関して、プロポーションや構成の観点から設計の修正を行い、あるべき姿を導きだしている。「吹上の家」は内立面の構成につい

てルート矩形を中心に整理し、また穿たれた立体開口については非遠近法を前提とした形態に変更するなど、立面を構成する要素の自立性と全体性の両立を高めている。「西新の家」についてはL字開口の奥に広がる空間のプロポーションを見直し、形態の自立性を高めるためにこれにもルート矩形を採用している。「京町の家」についてはキュビズム的知覚を純化するために、構造的要素やディテールの省略を行っている。

また純粋芸術との比較について、抽象絵画などにみられる抽象が抽象化された現象や世界を“結果として”タブロー上に提示するのに対し、本論における建築空間における抽象は、具象としての外的世界の景観を取り込み、それを抽象的な知覚に変換するための“プロセス”として捉えられており、そのプロセス自体を建築手法として提示する点が異なるとし、現代社会や今後の都市環境の変化に適応する建築の“境界のあり方”や、高密度や近接を許容する建築の“建ち方”の可能性を示唆する点に特徴があるとしている。

終章は、各章の要約である。

本論は、本学創造理工学研究科建築学専攻における、作品による博士学位の請求を行うものであり、専攻が定める審査受理内規を満たし、また学位授与に際して求められる作品の水準に照らしてその質を十分に精査した上で、以下の各点により、博士（建築学）の学位の授与に相応しいものと認める。

1) これまでモダニズム建築が扱ってこなかった郊外景観と建築の関係に注目し、風景を受容しつつ良質な内部空間を形成しようとする考え方が、輻輳する今後の社会と建築の関係の再考に示唆を与えていること。

2) 都市郊外の必ずしも良好でない立地環境に対して、従来コートハウス化や目隠しを施すなど、風景との絶縁化や曖昧化によって対応していたが、本論が提示する風景を再編集する「抽象化」の手法により、より積極的に建築の内部空間の質を高められること。

3) 風景の再編集に関し、既往の立面操作や開口部等のディテール操作などに陥らず、内立面と平面の組合せによる構成的な計画手法を考案した点が独創的であり、かつ設計法に本質的な変換をもたらすものであること。

2014年5月

審査員（主査）	早稲田大学教授	古谷誠章
	早稲田大学名誉教授	石山修武
	早稲田大学教授	工学博士（早稲田大学） 入江正之
	早稲田大学教授	工学博士（早稲田大学） 渡辺仁史